

---

# 宇宙の卵（ソラノタマゴ）

尺取虫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソラノタマゴ  
宇宙の卵

### 【Nコード】

N8590Y

### 【作者名】

尺取虫

### 【あらすじ】

20光年先の惑星グリーゼ583gに向かうため、小惑星を改造して作られた宇宙船「ソラノタマゴ」。地球から惑星グリーゼ583gまで、400年かかるという。テラフォーミングが完了するのに、さらに百年がかかることが予想される。この、ソラノタマゴが地球を出発して、二百年が経とうとしていた。主人公達の世代は、丁度中間地点の世代だ。

出発の高揚も無く、到着の喜びも無い。ただ未来へ宇宙船を渡すだ

けの存在。閉鎖され、管理された宇宙船の中では生きる意義も見出せない。心は振動することを忘れてしまった。孤独な宇宙船「ソラノタマゴ」の中で、心の欠けた部分を掴もうと模索する。

各登場人物の視点で綴る、思索する物語。

（星空文庫に重複投稿しています。）

## ハイイロタマゴ 1

遠い彼方の星、グリーゼ581gに向かって進む一つの宇宙船があった。窓も無く、空も見えない宇宙船。

「どうせ、グリーゼに着くまでに僕の命は尽きる。なんのために生きているのか。」そう、呟いた。      〽 セノアー・ケンピス 〽

白い天井を眺めていた。人工的な光が部屋を優しく包み、24・5に調整された空気が送気パイプから流れ込んでいるのを感じる。目を瞑り考え、呟く。

「どうせ、グリーゼに着くまでに僕の命は尽きる。なんのために生きているのか。」

意味や意義なんて、現実には存在しないんだ。それは自分自身で夢見るものだと思う。「意味づけ」を行うのは人間側でしかない。淘汰と選択、増殖。環境の多様性とそれに伴う進化の多様化。「意味」や「意義」も環境へ適応するための走性の発展形でしかない。細菌が餌に群がるようなものだ。

朝の目覚ましのため音楽が鳴り始める。ビートルズの『イエロー・サブマリン』にいつも設定している。この明るい歌詞がとっても気に入っている。

「、、この『ソラノタマゴ』では、叶わないだろうな。」

今日も独り言を呟きながらベッドルームを出た。これから、仕事場である「地衣類研究ルーム」へ向かわなければいけない。「地衣類の研究とテラフォーミング技術の開発」、それが僕の仕事だからだ。まあ、遅れたところで誰かに咎められるわけではないのだが。

正式名称「ユニコーン13号」、『ソラノタマゴ』と呼ばれるこの宇宙船は、約200年前に地球を出発し、グリーゼ581g、通称「ザルミナ」という星に向かっている。到着まであと200年。テラフォーミングに100年。実際にザルミナに住めるようになるには、少なくとも300年がかかるということだ。当然、僕はいいに決まっている。

ソラノタマゴは、直径一キロもある小惑星を改造することで造られた。重力を生み出すために、高速で回転しながら進んでいるらしい。ただ、重力は船内で大きな差があり、無重力から6G以上の重力がある場所まで様々だ。居住空間だけは、地球の重力と同じに設定されている。

実は僕は、生まれてこの方人間とあったことが無い。いや、船内に人間は何人もいる筈なのだ。だが、「ロードロックシステム」によって、人間の交流ができないシステムが構築されており、各々の仕事場と各個人の居住スペースしか行き来できないのだ。過去の口グを見てみると、どうやら大喧嘩があり、仲違い、分裂の危機にまで至りこのシステムを構築することになったらしい。仲良くすればいいのにね。

「ロードロックシステム」のお陰で、僕の前の世代では子供は誕生しなかった。今の世代は皆人工保育システムによって育てられた人間のはずだ。この人工保育システム自体は、テラフォーミング後

の急速な労働力不足を補うためにつくられたものだ。集団遺伝学の観点から自然な遺伝子セットを選び出し、幼児の段階まで自動的に育ててしまう画期的なシステムである。船内人口を非常時には維持するようにプログラムされていたらしい。

「…確かに、人間同士の交流なんて、この環境なら生存には関係しない。」

しかし、この全て調和され、管理されたソラノタマゴが、生きる意義を見出すことを妨げているように感じるのだ。

そんなことを考えていたら、我が仕事場、「地衣類研究ルーム」に着いてしまった。

## ハイイロタマゴ 2

地衣類。それは菌類と藻類の共生体である。劣悪な環境でも長い時をかけて成長し、無機的な世界に”土壌”をもたらす重要な存在である。その基盤にへばりつく形状と、厳しい環境に適応する強さがカッコイイ。惑星「ゼルミナ」の生物史の始まりに、これほど相応しい生物はいないだろう。

ケンピス 〽

〽 セノアー・

地衣類研究ルームに近づくとも体が重く感じる。この部屋の重力は地球の約3倍。正直、きついかな。もう、慣れたけれど。部屋に入ると僕はまず一日のスケジュールを、スケジュール管理プログラムに入力する。別にスケジュールなんて必要ないかもしれない。まあ、朝の儀式のようなもので、ただの日課だ。これを書かないと朝でないような気がする。

「午前中は講義、午後は研究かな。」

「やあ、おはよう。セノアー。」

モニターから声が聞こえた。人間では無い。教育プログラム「コア二」だ。

「おはよう。今日は遅いじゃないか。」

「生活が乱れているクルーもいてワタシも大変なのです。デスクの

上で連続4日も寝るんですよ。2週間も居住スペースに帰らないし。他にも、ワタシをDeleteしようとする人もいて！もう、泣きそうです。」

今日の「コアニー」は機嫌が良くないようだ。穏やかなプログラムののだが、怒ると怖いんだよな。小さい頃はよく怒られたっけ。

「へー。そんな人もいるのか。一回見てみたいものだな。」

ところで、今日のスケジュールはこういう感じだから宜しく。」

「ハイ。了解です。」

画面に大学の講義室の映像が映し出される。宇宙船に保管されているアーカイブ映像だ。今日は窓を開けているようで、講義室に流れ込んでくる風でカーテンが揺れているのが見える。その風を僕も感じてみたい。そう、思った。

午前の講義が終わった後、居住スペースで昼食を摂り午後からは研究を行う。小さな碁盤上の黒い碁盤の上に白っぽい地衣類が並んでいる。ブロック毎に、温度や湿度、吹き付けるガスの種類、光線量に変化させてある。各ブロックの株には、様々なパターンの遺伝子セットを組み込んであり、テラフォーミングに適した、環境への適応力の強い遺伝子パターンを持つ株をスクリーニングすることができる。…はずなのだが、正直成長が遅いため、なかなか結果がないでいる。

「この調子では、結果がでるのは3年後くらいになるのか。実験モ



デルが稚拙だったなあ。」

そうつぶやきながらも、今日も地衣類のデータを収集し、データベースに入力した。誰かに評価されるわけではないけれど、まあそれが僕の仕事だし、地衣類って見た目がカッコイイし、何か物足りなさはあるけれど…なんかまあいいかなって思う。

そんないつも通りの一日だった。

### ハイイロタマゴ 3

ソラノタマゴの中からは測定機器を通してしか”外の世界”を見ることはできない。どんな宇宙の事象も新鮮で愛おしいものに感じるでも、触れることは一生ない。「世界はただの”物質や法則”でもそれはとってもキレイ」もっと世界を自由に感じたい。それだけが私の望み。

） ラノミナ・フュサリユー

（

デスクの上から今日も一日が始まる。モニターに映し出される電波望遠鏡のデータを見ていたら気が付かないうちに寝てしまったようだ。まあ、いつものことなんだけど。

「おはよう。ラノミナ。スケジュールをちゃんとしなさいと何度言ったらわかるのですか。」

モニターから声が聞こえる。教育プログラム「コアニー」だ。どうやったらこのプログラムをOFFにできるんだろう…

「いいじゃない。どこで寝ても一緒でしょ。」

…服がよだれで汚れちゃうのは嫌なんだけれどね。

「スケジュールを作ったことすらないなんて人間失格ですよ！ほら、早く顔を洗って朝ごはんを食べてください。」

「えゝ。面倒だなあ。嫌だ。別にいいじゃない。」

「コアニー」は機嫌を悪くしたようだ。部屋の灯り、測定機器、記録機器の電源を次々に切り始めた。…ちよつと意地悪をしすぎたようだ。

「わかった！わかったわ。一旦、部屋に帰るからそれだけは止めて！」

部屋に戻り2週間ぶりのシャワーを浴びた。水が冷たく感じた。感覚器官から直接、物質の状態を把握することはこんなに気持ちがいいことなんだ。

宇宙のどんな壮大な現象も、宇宙の法則に沿って起きただけのことだ。この私だってただの物質でエネルギーの流れの一部でしかない。でも、私にとってこの世界はとってもキレイで愛おしいものを感じる。嫌いなものを見つけるのが難しいくらい。

できれば、ソラノタマゴの岩石で覆われたガッチリした殻の中からではなくて、体全体で宇宙を感じたい。モニター越しでなくて、自分が事象に干渉できるくらい。近くで、もっと自由に。それが私の叶わない望み。

## ハイイロタマゴ 4

風が吹かない「ソラノタマゴ」の中では、木の幹は曲がりくねり弱弱しくしか育たない。植物には自然の力強い風が必要なのだ。時には枝が折れてしまうほどの荒々しい風が。私は、この宇宙船の中に自然の風が吹かないことをもっとも憎む。

「 ミュエネ・ハッシュ 」

林の中に、ミストが降りてくる。この宇宙船の中で唯一の土の上に寝転び、朝のミストを浴び輝く木々を見上げている。私はこの時間が一番好きだ。木から落ちてくる水滴が顔に当たるとちよつとうれい。

おそらく、「ソラノタマゴ」の中で一番広い占有スペースを、私は持っている。林を模したこの「休憩談話ルーム」。この部屋は、昔は文字通りクルー達が集まって休む休憩室だったらしい。でも、「ロードロックシステム」が今はあるせいで、植物を管理する私しか入れない。私が入れる部屋はもつとある。今は無人で稼働している「植物性食糧生産ユニット」、テラフォーミングに使う植物について研究する「植物研究ルーム」。植物に関係する部屋は、大体私しか入れないようになっている。私は、植物が無いと生きていける気がしないんだけど、他のクルー達は大丈夫なのかな？

「さあてと。今日は剪定でもしてあげようかな。」

この部屋の木々は痛々しいほど曲がり、折れているものもある。宇宙船に保管されているデータを見ると、木の姿は本当はこんな風ではないらしい。真っ直ぐと空に向かって伸びる、というのが本当

なのだ。こんな痛々しい姿になってしまふのは、この「ソラノタマゴ」の中では自然な風が吹かないからだ。この部屋を作った人は、植物にとって一番良い環境にしようと思ったのだらう。害虫も無く、枝を折る風も無く、水分と光、養分は定期的に補給される。確かにそれは植物にとって夢のような環境だらう。でもそれでは駄目なんだ。強い風を受けない枝や幹は弱弱しく、すぐに折れてしまふ。乾燥を知らない根は大きく広がることができない。

「よし！さあ、やるぞ！」

そう。言って、作業に取り掛かった。

## ハイイロタマゴ 5

「見えざるピンクのユニコーン」の存在を証明することは不可能だ。ただ、信じるのみ。もし、世界が180度変わってしまったても、証明できないものをそれでも信じ続けるなんてことが可能だろうか。例えば、宗教組織が無くなっても信じ続けることができるだろうか。

） ナターク・ガルア

昔の説教師が話しているアーカイブ映像を見ながら、ナターク・ガルアは片肘をつきながら、ぼんやりと考え込んでいた。

おれは、この宇宙船では所謂”宗教”つやつを担当している。

「見えざるピンクのユニコーン世界教会」、それがこの「ソラノタマゴ」を打ち上げた組織の名前だ。こんな壮大で、利益でない宇宙への遠征ができるのは、宗教の賜物だろう。信仰心というのはそれだけ、非合理的な行動を可能にしてしまう。この宇宙船の最初の乗組員は、「見えざるピンクのユニコーン」を深く信じるもの達だったという。今はどうだろうか。乗組員達は、一応教義を教えられているはずだ。しかし、その信仰を確かめる術は無い。

もしかしたら、信じているものもいるかもしれない。でも、おれはそんな奴は少ないんじゃないかと考えている。宗教はどんな宗教でも、”世界観”と”社会性”をセットにして信者達に提供される。この宇宙船内は、「ロードロックシステム」で封鎖されているから、思想の共有、相互扶助、コミュニティー形成といったことが不可能なため、”社会性”の部分は成立しない。”世界観”はどうだろう。

この宇宙船の中は「外」が無い。宇宙船の中は”世界観”を醸成するのに不十分な広さしかなく、しかも各個人が行き来できるスペースはかなり小さい。

だいたい、おれの世代は人工保育システムによって育てられた世代だ。人工的、科学的に誕生したのに関わらず、神秘的なものを信じるなんて、ちょっと難しいことのように感じる。

説教師は熱狂的に叫ぶ。

「見えざるピンクのユニコーン達は偉大なるスピリチュアルパワーの存在であるのだ！我々は彼女らが目に見えないと同時にピンク色で存在することが出来るがゆえにそれを承知している。見えざるピンクのユニコーンの教義は論理と信仰に基づいている。我々は彼女らがピンクであると信じている！我々は、我々が彼女らを見る事ができないから見えないのだと論理的に知っているのだ！」

この節はイーリーの声明と呼ばれる、何百年も前から信じられている有名な語句だ。内容を間違えると「見えざるピンクのユニコーン」を冒涇することになるので注意が必要である。

人や「神秘の外界」との接触を絶たれたこの世界で、そんな語句になんの意味があるのか。

「はあ。」

なんだか何もかも無意味な気がして溜息をついてしまった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8590y/>

---

宇宙の卵（ソラノタマゴ）

2011年11月27日17時51分発行